

バカとゲームとRPG

関谷慎太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

明久らはいつものメンバーで今話題のバーチャルリアリティゲーム、ファイバーアートオンライン（FAO）をプレイしていた。

だがゲーム会社のミスでゲームの中に閉じ込められてしまう

明久たちはゲームからの脱出するために最下層にあるコンピューターを目指すことになったのだが、はたして明久たちは無事ゲームから脱出することができるのか？

バカテスとSAOのミックス版で書いて行こうと思っておりますがRPG全般入ってきます

読みにくいと思いますがよかつたら読んでください

書くの遅いので迷惑書けます

目次

第一問	1
プロローグ	5
第二問	8
キャラ設定&FAOについて	15
第三問	19
第四問	23
第五問	30
第六問	34

第一問

「……………明久例のものが販売開始だそんだ」

「本当にムツツリーニ」

「……………俺の情報網なめるな」

「なら今から買いにいかなくちや補習なんか受けている時間がもつたいない」

明久がドアに手をかける前にドアがひらいた

「お前から今から補習を　　明久、お前は何をしているか早く席につかんか」

鉄人もとい西村先生が明久の前に立っていた

「鉄人がなぜ」

「誰が鉄人だ明久いつも西村教諭と言えと何度言っているだろう」

「すみません西村先生それでは」

「明久どこへ行く?」

鉄人に首根っこを掴まれた

「西村先生僕は今からトすイレに行こうと」

「ならなぜ鞆を持っていく必要がある」

なぜかこの後鉄人の拳が僕の頭に直撃していた

キンコくカンコく

「今日の補習はここまでだお前ら寄り道せずに帰れよ」

鉄人が教室を出ると皆が僕の周りにあつまってきた

「やつと終わった」

「明久よ、なぜ帰ろうとしたのじゃ？」

不思議そうに秀吉がたずねてきた

「……………これ」

ムツリーニが一枚の紙を取り出して見せてくれた。

「なんだムツリーニ見せてくれ」

「わしにも頼むのじゃ」

雄二と秀吉は紙を見るなり目の色が変わったように言った

「ムツリーニこれはまさかあのゲームの最新版か」

「……………そうそれはファイバーアートシリーズの最新版」

「だがムツリーニよF A（ファイバーアート）シリーズはこの前の作品で完結したのでわな

いのかのう」

「……………ファンの要望によりまた開発されたらしい」

そこで紙を見ていた雄二が何かを言い出した

「でもこのタイトルのFAOのOで何なんだ」

「……………Oはオンラインの略で今回のFAはネット通信が利用できる用になった見たいだ」

「しかもこのゲームはバーチャンリアルティーなんだってさ」

そう言うとは皆は馬鹿を見るような目で僕をみてきた

「明久よそれお言うならバーチャルリアリティーじゃ」

「えっそうだっけまあいいや、それより早く買に行こうよムツツリーニ」

「だが待て明久これ限定一万本しか販売しないらしいぞ。今から行っても無いんじゃないのか」

「そうだった」

その場に倒れこむ明久だったがムツツリーニが口を開いた

「……………俺に抜かりはないちゃんと予約をしておいた」

「それを早く行つてよムツツリーニ、落ち込んだ僕がバカみたいじゃないか」

「……………言おうとしたが明久が勝手に行くこうとするから言うタイミングがなかったから」

2人で話していると秀吉が2人に言った

「よいのおわしもやってみたかったのじゃ」

「そうだな俺もやって見たかったぜ」

悪友の雄二も悔しそうにつぶやいた、するとムツツリーニは2人に言った

「……………そう言いと思つて皆の分予約済み」

「本当かムツツリーニそれはありがたい」

「ありがたいのじゃムツツリーニよ」

「……………礼にはおよばん」

「それじゃあ皆で買いに行こうよ」

「そうだな、でムツツリーニ何処のゲーム屋だ」

「……………いつもの駅前のゲーム屋だ」

そう言い教室を出た明久たちだった

プロローグ

「明久これは同言うことだ」

「多分閉じ込められたみたいだよ雄二」

バカ顔の男は赤い髪のごつい男に言った

「バカか明久そんなことはわかっている、俺が聞きたいのはどうして閉じ込められたかと聞いているんだ」

「そんなの僕に言われてもわかんないよ」

「そうか明久、テメーとはいつか決着を付けよおと思つてたんだがここで付けてやる明久」

「望むところだ、雄二返り討ちにしてやるよ」

2人はそう言うのと武器を構えた

「辞めぬかおぬしらこんなところで喧嘩などしとるばわいではなからう」

止めに入ったのは秀吉だった

「だつて秀吉、雄二のバカが」

「まて明久、誰のせいでおおなつたと思つてるんだ」

「

「……………明久のせい」

「明久のせいじゃな」

みんなが一斉に明久を見た

「うっ、それはそうだけど皆だつてノリノリだつたじゃないか」

「それはそうだがお前が変なゲーム持つて来るからだろうが」

悪友は、場が悪そうに言った

「そうだけど雄二だつてやってみたいと思つてたて言つてたじゃないか」

また口喧嘩が始まったのを秀吉が止めに入ったのだ

「まあ、おぬしら言い争いしていてもらちがあかんのじゃ、とりあえず脱出方法を考えるのじゃ」

「……………脱出するのが第一だ」

「そうだね早く出口を探そう、雄二なんかいい方法はないの？」

「そうだなとりあえずなぜログアウトできないかを探さないと始まらんからな最下層にあるサービスコンピュータにハッキングして何が起きているか知る必要があるな」

「……………ハッキングならまかせろ」

「とりあえず最下層目指して楽しく行こうよ」

「明久にしてはまともなこと言つたじゃねえか、よしお前ら最下層目指して出発だ」

こおして僕らの旅は始まった

第二問

「それじゃあお前から今日の午前0時に始まりの町の広場にに集合だぞ」

僕たちはゲームを買い解散し皆一緒に始めようと時間を決めて解散した。

今の時刻は午後11時40分僕はゲームを起動した

「確かこのヘットギアをかぶって電源を入れて合言葉を言うんだっけ」

そう言いながら僕はゲームの準備をしていた

「確か合言葉は」

僕は合言葉を言った、それが現実であつた最後の言葉だつたなんてこの時の明久は知らなかつた

「フイーバーイン」

明久が言うのと真つ白な光に包まれた

「ようこそFAOの世界へ」

僕がきずくと目の前に女の人が前にいた

「えーと確かここはFAOの中だよね」

「そうでございませす」

女の人は丁寧に説明してくれた

「それではキャラクター設定を行いますお名前をどうぞ」

「明久でお願いします」

「了解いたしましたそれでは明久様武器と種族をお選びください」

F Aでは始めに自分の使うキャラの種族と始めにもらえる武器を選べるのだ

「ヒューマンで武器はソードでお願いします」

僕はとりあえず基本的な者を選んだ

「了解いたしましたそれではF A Oの世界をあ楽しみください」

僕は案内されたゲートを潜った、ゲートを潜ると始まりの町だった

「これがゲームの中とは思えないな」

僕はあまりのリアルさにおどろいていた

「それじゃあ雄二達との待ち合わせ場所にいかなくちや」

僕はとりあえず雄二達と合流する中央広場を目指した

「多分この辺りだと思っけどな」

明久は迷っていた

「どうしよう道に迷った」

そう考えていると声をかけられ、

「どうかしたの」

声の主は僕の顔を覗き込んでいた

「いやちよつと道に迷っちゃって」

「なくんだそうなんだったんだ」

その声の主は笑いながら言った

「お兄さんどこに行くつもりなの」

「僕は中央広場に行こうと思ってたんだ」

「なんだ私と一緒にだねなら一緒に行っただげよか」

「えっいいの助かったありがとう僕の名前は明久よろしく」

「私の名前は由美（ゆみ）よろしくねアキー」

「由美ちゃんかよろしく」

僕がゲームを初めて最初に話したプレイヤーは由美ちゃんだった

「アキーこつちだよ早く早く」

「待つてよ由美ちゃん早いよ」

そう言いながら歩くと噴水が見えてきた

「ここが中央広場だよアキー」

ピョンピョン跳ねながら手をふる由美ちゃん

「あんまりはしゃぐと転けるよ」

僕は由美ちゃんに言った直後にこれは起きた

「大丈夫ですよくだきゃー」

由美ちゃんは言った次の瞬間噴水に落ちそうになった

「危ない」

僕は走りながら叫んだ、間に合え僕は心の中で願ったがスタートが遅くマニアワナイ
と思つた瞬間由美ちゃんを助けた人がいた

「何をバカな事してるか由美」

その人は由美ちゃんの知り合い見たいだった

「あーお兄ちゃんありがとう」

その人は由美ちゃんのお兄さんだった

「大丈夫由美ちゃん」

僕は一樣由美ちゃんに声をかけた

「アキー大丈夫だよ」

すると由美ちゃんのお兄さん由美ちゃんに聞いた

「由美この人は？」

「あーこの人はアキーだよさつきそこで知り合つたの」

由美ちゃんが僕のことをせつめいしていた

「はじめまして僕明久て言います由美ちゃんとはさつきそこで道に迷ちやつてると頃を助けていただきました」

「そうか自分はてつきり由美にたかる虫かと思つて殺ろうと思つていたところだがそうだったのかすまない」

「ちよとお兄ちゃんアキー怖がつてるよ」

「この人はなんて恐ろしいんだ」

「すまないさつきのは冗談だ自分は由美の兄のシンだよろしく」

「お兄ちゃんの冗談は冗談に聞こえ無いんだかね」

「わかっているそんなのは、明久君だったかなあ？」

「はい」

「自分の妹が迷惑をかけてすまなかつたな」

「お兄ちゃん迷惑なんてかけてないよ」

由美ちゃんは怒つて行つた

「そうですよ逆に僕の方こそ迷惑だつたと思います」

すると由美ちゃんが慌てて言う

「そんなこと無いよアキー」

そんな話しをしていたらシンさんが口を開いた

「由美そろそろ行くぞ」

「えっもうそんな時間だったの」

シンさんが最後に言ってきた

「ここであつたのも何かの縁だフレンド登録したいのだがいかな」

「いいですよ」

そお言うときシンさんはアイコンをひらきフレンド登録をもしし込んでいた

「後で暇なときに登録してくれ」

「またねアキーバイバイ」

そう言いシンさんと由美ちゃんを連れて去つて行つた

「由美ちゃんまたね」

そんなことをしていると皆が到着したようだ

「珍しいな明久お前が一番?」

悪友の雄二が話しかけてきた、次はムツツリーニが到着したようだ

「……………待たせた」

最後は秀吉だった

「すまぬの皆の衆最初の手続きに時間がかかってしまったのじゃ」

「それじゃあ皆きた事だし先に進みか」

こうして僕らの冒険は始まったのだった

キャラ設定&FAOについて

キャラクター設定

吉井明久

ゲーム内名明久

性別、男

種族ヒューマン

武器ソード

スキル、召喚獣召喚、ダブル、逃げ足最強

その他は本作と同じ

坂本雄二

ゲーム内名雄二

性別、男

種族ビースト（狼）

武器ナックル

スキル、召喚獣召喚、肉体強化、破壊の一撃、ビーストモード、逃げ足最強

その他本作と同じ

土屋康太

ゲーム内名ムツツリーニ

性別、男

種族ヒューマン

武器忍者刀&手裏剣

スキル、召喚獣召喚、暗殺、分身、逃げ足最強その他本作と同じ

木下秀吉

ゲーム内名秀吉

性別、秀吉

種族エルフ

武器弓矢

スキル、召喚獣召喚、名演、声真似、

その他本作と同じ

オリキャラ

谷島由美（たにしまゆみ）

ゲーム内名由美

性別、女

種族エルフ

武器短剣&ハンドガン

スキル、魔法弾、身体強化魔法、回復魔法、攻撃魔法

その他

年齢16才

見た目は12ぐらいで幼く見える見た目くいつも小学生に

間違えられやすい

兄思いの優しい子である

ちなみにFAOのβテストの参加者である

谷島慎吾（たにしましんご）

ゲーム内名シン

性別、男

種族ビースト（チーター）

武器ソード&ガン

スキル、魔法弾、身体強化、肉体強化、ビーストモード、二刀流、二丁拳銃

その他

年齢17才

見た目はかなりの美少年でかなり女性にモテルが女性恐怖症のため妹の由美以外の女性に触れる事が出来ない女性恐怖症になったのは姉が原因らしい

F A Oのβテストの参加者である

明久にどこか同じ匂いを感じている

他のキャラは別の時に書きます

第三問

僕らはクエストをするために掲示板の前に来ていた

「雄二これってまさかあれだよな」

「そうだな明久」

僕と雄二が掲示板の前で固まっていると後からきた秀吉とムツツリー二が言った

「どうしたのじゃ、そんなところで固まって」

「……………多分これだと思う」

そう言うともムツツリー二は掲示板に張られた一枚の紙を手に手取った

「何が書いてあるのやじゃ」

秀吉は紙を手に取り読み出した

「何々、吉井明久、坂本雄二、木下秀吉、土屋康太、以下のもの達にクエストをさせる（このクエストは拒否やリタイアする事はできない）クエスト内容は後にコンタクト入れる」

秀吉が書いてあるたと2人が動き出した

「あのクソババア長がよくも僕（俺）の邪魔ばかりしやがって」

2人が叫んでいると明久にコンタクトが入った、明久はそれに出た

「クソガキどもが、やっぱりプレイしてたかね」

「うるさいババア長」

「いきなり人をババア呼ばわりかい、相変わらず口の悪いガキだね、そんなことはいいとしてあんたらに頼みたい子とがあるさね、とりあえず坂本に変わるさね」

僕は雄二にコンタクトの権利をわたした

「何だババア俺たちは今からこのゲームを楽しみたいんだ邪魔はやめて欲しいのだが」

「邪魔なんかしないさね、ただ頼みたい事があるだけさね」

俺たちには関係無いことだ、それに頼みを聞いて俺たちに何の得がある」

「それが関係あるし、 特もあるさね、このクエストをクリアして手に入れたアイテムはあんたらにくれてやるさね、ただある事を消して欲しいのさね」

「それだけならやらん、ただひとつ条件を飲むなら受けてやってもいいぞ」

「ちい、仕方ないさね飲んでやるさね」

すると雄二は「こそこそと学園長と話しを進めた

「それじゃあ契約成立でいいんだな」

「いいさね、それじゃあ後は任せるさね」

学園長はそう言ってコンタクトを切った

「そう言うわけで第15層の迷いの森に行く事になった」

「なんでそうなったんだ雄二」

「そうじゃ雄二よ」

「…………俺たちには関係の無いこと」

皆で雄二をせめていると雄二が言った

「それが関係無いとは言えんのだ、クソババアが頼んで来たのはテストプレイヤーの救出何だがその中に翔子達がいるらしい」

「それなら雄二が1人で行けば良いしじゃないか僕達は関係無いじゃないか」

「待て明久人の話しを最後まで聞け、テストプレイヤーは皆で4人いるらしいでその4人が姫路や島田それに工藤と来ている」

「えっ姫路さんや美波までもいるの」

「それは大変なのじゃ早く助けに行くのじゃ」

僕らはあわてて用意をしようとすると雄二が言った

「まてお前らまだ話しは終わってない、それに俺たちのレベルじゃあそこまでたどり着くのは無理だ、だからババアに頼んでこのゲームの経験者を2人呼んでもらったところだ、出発はその2人と合流してからだ」

「わかったよ雄二で合流場所はどこなの」

「合流場所は始まりの街の宿屋だ」

僕達はその2人の待つ宿屋へ向かった

第四問

俺は届いたメールを見ながら妹に話しかけた

「本当にここで間違いないのか由美」

「大丈夫だよお兄ちゃんまったく私の事信用してくれないんだから」

彼女は頬を膨らませて言った

「すまんすまんそう怒るな、セツカクの可愛い顔が台無しだぞ」

「かっかか可愛いって〜お兄ちゃんたら恥ずかしい事を口にして〜」

彼女は顔を真っ赤にしていた

「それにしてもいつまで待たせるつもりだあいつらは？」

「まあまあそう焦らないのお兄ちゃん、ほら来たみたいだよ」

由美が入り口の方向を指した、その先には4人のプレイヤーが立っていた

「雄二本当にここで間違いないの」

「ああ間違いないここで会っている」

2人のプレイヤーが何か話しているようだが俺は無視して話しかけた

「お前らかあのババアの選んだプレイヤーは？」

2人に俺は話しかけた

「あんただれだ？」

雄二とか呼ばれていた方が聞いてきた

「ごめんねいきなり私のお兄ちゃんが、私は由美でこつちがお兄ちゃんのシンよ」

女の子の方が言った

「こつちの方こそ僕は明久……」

そこまで言つて僕はおどろいた、あれシンさんに由美ちゃんつて確か、そう考えていると女の子が

「あれ、もしかしてアキー、忘れちゃた？私だよ由美だよ」

「もしかしてシンさんに由美ちゃん？」

「何だ明久知り合いだったのか？」

「うんさつき話した2人だよ」

「なら明久と俺の自己紹介はいららないな」

「あれ雄二も知り合いなの」

「ああな前に一回まえにな」

「もしかして羅刹かおまえ」

「その話しはやめてくれシン、そんなことより後の2人と自己紹介をしませてくれ」

「ああわかったよ、俺の名前はシンでこっちが」

「私が由美です」

「……………俺はムッツリーニよろしく」

「わしは秀吉じゃよろしく頼むのじゃ」

自己紹介を済ませてから

「よろしくな、それじゃあ本題に入るぞ、俺達の目的は迷いの森でいなくなったテスプ
レーヤーの救出及び原因の調査だがいいか？」

「大丈夫だ」

「話が早くて助かる、だが今のお前らの装備やレベルでこられても足手まといだから
二週間でレベルを20まで上げて武器スキルの習得をしてもらう」

「わかったそれでいい、明久達は任せた、俺は単独行動をとらせてもらいう、二週間後に
迷いの森の入り口で会おう」

雄二はそう言うのと宿屋を出た

「と言うわけでこれからビシバシ鍛え上げるからな!!」

「じゃあアキーは私が教えたげるね」

「よろしくお願いたします」

「早速だが今から始まりの街の外の始まりの森に行くぞ」

こうして僕のクエストは始まった
始まりの森

「ハアアヤアアタアーフウーキツイ」

僕達は始まりの森にいた

「アキーもだいぶなれてきたね」

「そうかな？多分由美ちゃんの教えかたが良いからだよ」

そんなことを話しているとまた敵が出てきた

「アキー来たよさつき話した通りにすれば大丈夫だからね」

「わかってるよ」

敵はゴブリンが三体

「アキー行くよ、スイッチ!!」

由美ちゃんがゴブリンのこん棒を弾いたすきに僕がゴブリンのがら空きになったお
腹に斬りをかます

「まだまだ行くよアキー」

「了解」

このあと僕は由美ちゃんと2人で戦い方を練習しながらレベルを上げた

「アキーそろそろ戻ろうか？」

「はあはあそうだねそろそろ帰ろうか、でも一日で上がったのは3レベルかあ」

「それだけ上がれば良い方だよ、それに後半はアキーマンで戦ってたし、本当に初心者なの？」

「初心者だよ、それにしても由美ちゃんはすごいね、あんなデカイゴブリンを一撃で倒すんだから」

「アキーマンだってスキル使える用になれば倒せるよ、そうだアキーマン」

「ステータス見せて」

「ええいいけど何で？」

「良いから見せて」

「僕はアイコンを見せた」

「やっぱり」

「どうかしたの」

「アキーマンステータス割り振りしてないでしょ」

「何それ」

「さっき話したじゃん、レベルアップしたら振り分けポイントがランダムでもらえるって言ったでしょ」

「そうだったねゴメンゴメン宿に帰ったら振り分けるよ」

「でもアキーって運良いね全部振り分けポイントMAXで持ってる」

「そんなことより僕疲れたから早く宿に帰ろうよ」

「そうだったねちよつと待ってて」

由美ちゃんはそう言いながら一つのアイテムを取り出した

「由美ちゃんそれ何？」

「これ、これはね転移結晶って言って行きたい場所にワープできるの」

「便利だねそれ」

「うん、それじゃあ帰るよ、転移始まりの街へ」

すると僕と由美ちゃんは光りに包まれきざいたときには宿屋の前にいた

「由美に明久やつと帰ってききたか？」

「あつ、お兄ちゃんお帰り」

「どうもシンさん今帰りました」

「もう2人は先に部屋に行つてりぞ」

「それじゃあ自分も部屋に戻りますね」

部屋に行こうとすると由美ちゃんに止められた

「あつ、アキー後で私の部屋に来てね」

「えっ、どうして？」

「良いから後で私の部屋に集合だからね」

そう言いと由美ちゃんは部屋に帰って行った

そして僕も部屋に帰った

「由美のやつ何考えてるんだ」

疑問に思いながらシンも自分の部屋へ帰って行った

第五問

由美ちゃんと別て僕が部屋に戻ってから三時間が過ぎた頃にメールが届いた
「こんな時間に誰かな」

メールの差出人は由美ちゃんだった

「由美ちゃんからだ、何だろう。」

僕はメニューを操作しメールを開いた

「アキー遅いよまだく？、もしかして約束忘れちやてるのかな？、アキーレディーを待たせちやダメなんだよ、早く私の部屋に集合だよ」

と書かれていた。

「ヤバイ忘れてた、由美ちゃん怒らせちやつたかな、とりあえず由美ちゃんの部屋にいかないかと」

僕が部屋を出ようするとドアをたたくおとがした

ドンドン「明久よおるかの？」

この声は秀吉何だろう早く由美ちゃんの部屋にいかないかといけないのに、僕はとりあえずドアを開けた

「どうしたの秀吉？、僕今から用事があるんだけど？」

「すまぬの、忙しい所、たいしたことではないのじゃがな、お主に相談があるのじゃ」
秀吉と話しをしようとしたその時またメールが入った

「ちよつとごめん秀吉」

僕はメールを開く

「アキー早く来ない怒るよ（怒）」

由美ちゃんすごく怒ってる

「ごめん秀吉、僕急ぐからまた今度聞くから」

そう言うって僕は秀吉をおいて去った

「待つんじゃ明久よ！」

秀吉が呼び止めた月明久はもうその場はいなかった

「まったく人の話しを聞かぬのじゃ」

由美ちゃんの部屋

由美はシャワーを浴びながら言った

「もうアキーのバカ」

頬っ　　ぺたを膨らませて怒りながら由美はお風呂場を出た

「まったくアキーたらこんな可愛い私がお部屋に誘って上げたのにまったく」

そんな独り言を言いながら下着を着ているとドアをたたたくおとがした

ドンドン 「由美ちゃんごめん遅くなつて」

「あつアキーだ、アキー今手が放せないから勝手に開けて入っていいよ鍵空いてるから」
「わかつたじやお邪魔します」

「ガチャ」ドアの空く音

「ガチャ」お風呂場のドアの空く音

「……………」明久と由美が固まる

明久が先に声をかけた

「やあ、由美ちゃん」

すると由美ちゃんも返して来た

「ヤホーアキー」

2人の間に妙な時間が流れた

「由美ちゃん可愛い下着だね」

僕はとりあえず誉めてみた

「ありかと…」

するとみるみる由美ちゃんの顔が赤くそまっついていった

「アアアアアキーのエエエエエエツチ……………」

次の瞬間由美ちゃんの右拳が僕の顔にめり込んでいた

ドンガシヤンドカバキツバキツ明久が殴られ回りの物を巻き込みぶっ飛ばす音
僕の意識はここで途切れた

第6問

「ごめんアキー」

由美ちゃんが頭を下げて謝っている

「いいよ、僕も悪かったし」

僕は腫れた顔を撫でながら言った

「本当にごめんね、今ヒールかけたげるから」

そういえばと由美ちゃんは何かを唱えはじめた。すると何も無い空中にスペルが刻まれていきそれが僕を包み込んだ

「ふうー、終わったよアキー」

僕がききずくと顔の腫れが引いていた

「あつ本当だ、すごい」

「そうかなテへへ」

「それって僕もできるかのかな」

「簡単だよアキー、今から教えてあげよっか」

「えっ本当に、ならお願い」

「いいよ、私の指導は厳しいよ」

それから僕は由美ちゃんと2人で魔法の特訓を開始した

二時間ほどたつてやつと僕は二個魔法が使えるようになった

「アキー、今日はこれぐらいにしよう？」

「うん、わかったよ」

その後由美ちゃんの部屋で飲み物を飲みながら話していた

「それにしても今日発売のゲームなのに由美ちゃんはなれてるね」

「あれ、アキー聞いてないの私とお兄ちゃんはテスターだよ」

「えっ、本当に聞いてないよ、でもすごいなくテスターって百人一しかえらばれなかった

んだよね」

「そうだよ」

由美ちゃんは普通の事の用に話している

「それにこのゲーム開発したの私たちのパパだもん」

「へー由美ちゃんのパパがってえパーパーマジで」

「そんなに驚くことかな、ただ開発したただけなのに」

「いやいやすごいそれ」

「でも私はパパの事なんか大嫌い」

そんな話しをしていると由美ちゃんが泣き、ながらいつたい

「パパは私やお兄ちゃんのことをほったらかしてこんなゲーム作ってる人なんだよ」

「由美ちゃんお父さんと何かあったの？」

僕は聞いてはいけないことを聞いてしまったのかもしれない

すると由美ちゃんは話はじめた

「アキーになら話してもいいよ、実は私現実では歩けないんだ、私ね中学校の入学式の日
に事故にあつたらしいの、でも私はその日から一週間の記憶がないんだ、でね私は歩け
ない体になってしまったの、だから学校は通信制の学校に行つたから友達とかがいなかった
の、でもね私にはお兄ちゃんがいたの、私が事故に会つてから一度も現実では会つたこ
とないけど、いつもメールはげましてくれたんだ、それでねその事をパパに話したんだ、
そしたらお兄ちゃんのこととは忘れろとか言うんだ、でも私はお兄ちゃんとメールをつけ
たの、そしてねこのゲームで会えたんだ、だからこのゲームを開発したことは感謝して
るけど、パパの事は大嫌いなもの、あつごめんね私の事話しちゃつてマナー違反だったね」

僕はこの話を聞いてあつげにとられていた

「そんな暗くならないでよアキー」

だけど目の前には自分が初めて会つたときの笑顔があつた

「そうだね、暗くなったらダメだよね」

「うん、それでよろしい、それにね私アキーとも友達になれたんだもん」

そう言った由美ちゃんの顔は赤く火照っていたように見えた

「あつ、もうこんな時間だ、明日も朝早いか今日はここで解散」

そう言つて由美ちゃんに部屋から出された

「それじゃ、アキーお休み」

「お休み由美ちゃん」そんなやり取りをした後僕は部屋に帰つて行つた

すると僕の部屋の前でシンさんが待つていた